

＜日本イギリス哲学会 第110回部会関東例会 報告要旨＞

第一報告： アダム・スミスにおける共感と観念連合
 ——『道徳感情論』第五部についての考察——

太田 浩之

本報告の主題は、アダム・スミス（1723-1790）の『道徳感情論』（1759）第五部を主要な分析対象としながら、共感と観念連合という二つの異なる想像力の作用の関係をスミスがどのように捉えていたかを明らかにすることである。

スミスが共感を中心的概念に据えて道徳理論を展開した『道徳感情論』は、これまでに多様な側面から分析されてきた。そうした中で、『道徳感情論』第五部の慣習論は、比較的注目されることの少ない議論であるように思われる。本報告では、この慣習論を主題として取り上げ分析することで、スミスの思想に対する理解を一層深めることを大きな目的としている。

もちろん、比較的注目されることが少ないとはいえ、スミスの慣習論は全く無視されてきた、というわけではない。特に、自然法思想とスミスとの関係を重視する論者によって、『道徳感情論』第五部の慣習論の重要性は指摘されてきた。そうした研究において特に強調されるのは、例えば、嬰兒殺しを代表例として、特定の慣習を批判するため原理をスミスが『道徳感情論』第五部で論じているということだろう。

本報告では、こうした解釈とは別の観点から慣習論を分析する。その観点とは、異なる道徳判断のあり方をスミスが描いている箇所として慣習論を捉える、という観点である。そして、この観点に基づいて分析を行うことで、共感と観念連合という二つの異なる想像力の作用の関係を慣習論から把握することが可能であると本報告では論じる。その上で、共感と観念連合との関係についてのスミスの理解が、同時代の思想家と比べた場合に特徴的なものであることを明らかにする。

（一橋大学社会学研究科（特別研究員））

第二報告： ヒュームにおける行為選択の基準
—— 「いかに生きるべきか」 問題に関する一考察 ——

相松 慎也

本報告では、「いかに生きるべきか」という倫理学の古典的な問いに対し、デイヴィッド・ヒュームはどのような答えを与えられるか、という問題を検討する。もっとも、ヒュームの道徳論は「解剖学」を自称するように、基本的には道徳現象を生み出している心理的・社会的なメカニズムの探究がメインであり、「いかに生きるべきか」という実践的な問いに直接答えているわけではない。しかし、ヒュームは『人間本性論』第3巻および『道徳原理研究』の結論部で、自分の道徳論に基づけば有徳に生きることのメリットも容易に示されると述べており、少なくとも間接的には「有徳に生きるべきである」と回答しているように思える。

この間接的な回答には、検討すべき論点が少なくとも2つある。第一に、ヒュームにおいて「有徳に生きる」ということは一義的でないように思える。ヒュームは徳を有益性と快適性の観点から4種類の性質のいずれか（ないし複合）であると分析するが、どの徳目ないし性質が優越するのかという点は明らかでない。ヒュームの道徳論は、複数の徳目が対立するようなジレンマ的状况において「何をすべきか」という問いに答えられるのだろうか。

第二に、ヒュームの行為論を踏まえたとき、有徳な生き方がそうでない生き方に優越するのか疑わしい。ヒュームは行為の動機づけが概ね「快苦の予期」に始まると考えている。カールソン（2006）の言うように、もし予期される快が動機づけのみならず、それを求めて行為すべき理由を与えるのだとすると、私たちが結局のところなすべきことは、そうした快を最大化する行為だということになるだろうが、それはヒュームの考える有徳な行為と合致するのだろうか。

以上の検討を通して、本報告は、ヒュームにおいて「有徳に生きる」ことは行為選択の常識的・直観的な指針にはなるが、根本的な基準とは言えず、後者は「道徳よりも広範な快苦の考量」である、という解釈を提示する。

（東京大学）